6 報告事項 E_株式会社ドロップファーム講演会

Team T

Team T は県内有数のトマト企業ドロップファームを取材しよう！という企画で活動した。ドロップファームは GABA やビタミン C が豊富な“美容トマト”を中心に生産・販売されている会社である。美容トマトは恵比寿三越をはじめ有名百貨店で販売され好評をはくしている。また通信販売も行われており，近年では各メディアでもよく取りあげられている企業である。社長である三浦綾佳様は，もともと広告代理店に勤められていた方である。そこからなぜ農業の世界に入ったのか？農業のイロハを知らない高校生が農業を始めるロールモデルとして取材したいと生徒たちは考えたようである。

担当教諭がアポイントメントを取ったところ，快く取材に応じていただけることになった。最初から農場に来るより，事前に会社のことや農業分野へ進出した経緯などを聞いたうえで来た方が，より実りの多い時間になるのではないかという三浦様のご提案により，本校での講演会が実現した。

講演会当日は，Team T のメンバーはもちろん，女性の活躍に興味がある女子生徒が中心であった。

講演の様子

美容トマトとは何か，どのように作るのか，現状の会社の規模など何でも聞いて！というスタンスの講演でした。非常に明るくエネルギッシュな方でした。

質疑応答

生徒の質問ひとつひとつに丁寧に回答していただきまいた。

7 報告事項 F＿個人農家（八千代町）訪問

Team Y

Team Y は就農センターに取材し農業のはじめ方を学ぼう！という企画で活動した。就農センターを訪問する前に実際の農家の実情を取材しようということなり，Team Y のメンバーの保護者の方からの紹介で個人農家（八千代町）への取材が実現した。

取材させていただいたのは，八千代町で加工用キャベツ（冷凍食品等で使用されるもの）やトウモロコシ，白菜を育てている中村様の農場である。農業の魅力や苦労すること，日ごろ考えていることについて質問させていただいた。

農場の見学

あいにくの雨模様でしたが，キャベツ農場の前で生徒の質問に丁寧に答えていただいた。

自宅横の倉庫内にて

日頃心掛けていることや農業の魅力について教えていただいた。

良かった点

・高校生が農業を実際に始めることは経済面，時間（学業との両立）という観点から難しいことがわかった。しかし，いかにコストを下げ野菜を生産するのか，また，いかに美味しい野菜をつくるのかを工夫することにやりがいがあることを教えていただき，生徒たちもより一層農業の魅力を感じていたようである。

改　善　点

・こちらが何の目的で取材に伺うのか，事前にもう少し打ち合わせをしておくべきだった。生徒の質問が意図したものと違うように理解されていると感じる場面があった。

8 報告事項 G__株式会社ドロップファーム取材

Team T

前回の学校での講演会も参考にしながら，Team T のメンバーは自分たちで栽培する野菜品種や販売ルート，ターゲットなどを想定した簡易的な経営計画書を作成し，株式会社ドロップファームを訪問した。まず，自分たちが作成した経営計画書を株式会社ドロップファーム社長の三浦様に見ていただいた。内容は突っ込みどころ満載だったので，その旨を事前に三浦様には伝え辛辣なコメントをしていただいて構わないと伝えておいた。しかし，三浦様は生徒たちの経営計画書のダメだしから入るのではなく，生徒たちの経営計画書を最大限に生かしたアイディアを引きだすような質問をしてくださった。例えば，本校は保護者送迎が多い学校である。そこから『送迎者にドライブスルー的に野菜の漬物を売る』というアイディアを生徒たちから引き出していただいた。

次に，ハウス内のトマト栽培の様子を見学させていただいた。アイメック®というフィルムを使った栽培を展開されていた。この栽培方法はトマトの生命力を最大限に引き出すため，ビタミン C、グルタミン酸、GABA、B-カロテン、リコピンなどの成分が一般的なトマトに比べて高くなる特徴がある。

良かった点

・生徒たちが作った経営計画書を最前線で活躍される経営者に直接見ていただき，また多くのアイディアを引き出していただけたこと。販売ルートや売り方を工夫することで，より多くの作物を売ることができることを学んだようである。農業を“おいしい作物を売る”という観点以外に“どう製品を見せるか”“どのようなルートで販売するか”という観点に気付かされたようである。

改　善　点

・生徒たちが作った経営計画書を事前にもっとチーム内で議論し練り上げていく時間があれば良かった。定期試験や模擬試験などの学校行事の制約がある中で取材日を先に決めてしまったことで，練り上げる時間が十分確保できなかった。

生徒の経営計画書を前に

辛辣なコメントも構わない旨を伝えてありましたが，生徒からアイディアを引き出すような語り口で対応いただきました。

収穫したばかりのトマトを前に

とてもおいしそうなプチトマトでした。三浦様は，『このまま全部食べたい』とおっしゃっていました。

受粉にかかせない昆虫です

ハウス内に設置されたミツバチの巣箱をみています。

ハウス内の設備について

空中設備や日照，ハウスのフィルム素材について説明を聞いている様子です。フィルムの素材によって耐久性が異なること，ハウスを作る際は，その耐久年数によってはレンタルという手もあることを教えていただきました。

9 報告事項 H＿土浦市地域農業改良普及センター就農啓発講座

Team Y

Team Y は就農センターに取材し農業のはじめ方を学ぼう！と活動を行ってきた。その最終目標であった土浦市地域農業改良普及センターへの取材が実現した。

土浦市地域農業改良普及センターは就農支援を行っている機関である。就農支援を受ける方は，ある程度経営計画書（農業を始める場所や敷地面積，作付けする作物など）を描いて相談に臨みます。しかし，本校生徒たちにはまだそのような未来設計がないため，就農支援を受ける段階になかった。普通ならこの段階で終了となるわけだが，改良普及センターの担当者である篠塚様をはじめ、皆様の温かいご支援のもと就農啓発講座を開いていただけることになった。

新規就農者から取ったアンケートをもとにした就農クイズをしたり，農業を始めるための準備をフローチャートで説明していただいた。さらに，新規就農者に対する支援サポートの話や経営計画の立て方について，レンコンを例に具体的に説明していただいた。講座の後半は，生徒たちによるグループワークを実施した。講座で聞いたことをもとに，自分たちならどのような野菜をつくりたいか，どのような農業形態をとるかについて議論し発表を行った。

良かった点

・就農に向けてどのような準備が必要なのか，そしてどのようなステップを踏んで就農にいたるのかの見通しがついた。

・ある程度の経営計画書がないと話が進まないことがわかった。

改　善　点

・就農支援はあくまである程度の経営計画がある方が対象ということがわかった。生徒たちはゼロから農業について教えてもらえる場所という認識だった。生徒たちに経営計画書を事前に作成させてから就農支援を受けさせてもらうという設定にすれば良かった。

10 まとめ

農業未経験者の高校生たちが農業を始めようとすると，どのようなアイディアが生まれ，またどのような壁にぶつかるのかを映像におさめることを目標に本活動を開始した。大方，その目標は達成できたと考える。３チームともそれぞれ壁にぶつかったわけだが，その中で農業を始めることの難しさと農業の可能性に気付いたようである。また，一つの作品を集団で作り上げることの大変さ，作り上げたときの充実感を経験できた生徒は，コロナ渦の中で学校行事が中止になる中で貴重な経験ができた。

本活動の最終目的は，ドキュメンタリーを制作する過程で新規就農者減少の原因を探ることにあった。その達成には，高校生たちが本当に農業を始める（もしくは始める準備を本格的に行う）ことが必要であることがわかった。しかし，実際にはそのような活動はできず，新規就農者減少の原因を高校生自らの体験から探ることはできなかった。しかし，３チームの取材から栽培方法には土を使わない水耕栽培，植物の生命力を極限まで引き出す方法などがあることがわかった。また，収穫した作物がいくらおいしくても必ずしも売れるわけではなく，作物の見せ方・売り方の工夫が必要ということもわかった。農業という世界を幅広い視点からとらえることが出来たと考える。“農業＝作物を作る”だけではないということが体験できた参加高校生は，今後，各方面でこの経験を生かしてくれることと期待している。

11 謝辞

当活動は，バイテク情報普及会の支援により実施することができた。生徒たちに貴重な経験をさせられたのも支援あってのことである。本紙面をかりて謝辞を表する。